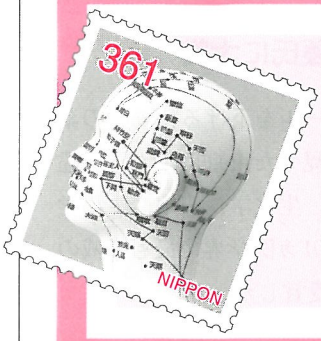

「第二次日本経穴委員会」便り

～第53回　統一教科書で教育を実践する意義～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員　坂口俊二（さかぐちしゅんじ）

日本の経絡経穴の教科書は2著、いや3著?

2006年、WHO/WPRO（世界保健機関/西太平洋地域事務局）主導により、経穴の世界標準部位が制定され、昨年『WHO STANDARD ACUPUNCTURE POINT LOCATIONS IN THE WESTERN PACIFIC REGION』が出版されたことで、経絡経穴が世界的に広がる契機となった。

日本の経絡経穴の教育は、鍼灸あん摩マッサージ指圧の専門学校が所属する東洋療法学校協会と、盲学校理療科の教員組織である日本理療科教員連盟が、1996年に国内で使用される教科書の経穴部位等を統一し、前者では『経絡経穴概論』、後者では『基礎理療学Ⅱ』が作成され進められてきた。しかし実際は、部位標記や取穴の表現は必ずしも統一されておらず、1989年に開催された「鍼用語標準化国際会議」（ジュネーブ会議）の決定に沿ったものでもなかった。

国際標準化に向けて日本では、1975年に結成された（第一次）日本経穴委員会が調査研究を行い、ジュネーブ会議終了後、その成果は『標準経穴学』としてまとめられ、現在まで資料的価値が高く評価されている。しかし、この状況を諸外国、とりわけ中国・韓国は、日本には経絡経穴の教科書が3著存在すると冷ややかに受け止めてきた。

2002年、鍼灸にもグローバリゼーションが叫ばれるようになり、経穴部位の標準化検討がジュネーブ会議後13年の時を経て再開し、2003年にマニラで第1回経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議が開催され、2004年3月には第2回諮問会議が北京で開催され、「北京合意」として標準化作業を進める上での原理原則が決定された。

日本では、2004年4月に第二次日本経穴委員会が組織され、日本案の作成を作業部会が担当することとなった。中国・韓国にはジュネーブ会議の決定に基づく国定教科書が決められていたが、日本では前述のとおり3著が並列する状況にあった。作業部会では、『標準経穴学』を資料に『経絡経穴概論』と『基礎理療学Ⅱ』の部位を比較しながら、日本案を作成し、日本案と中国・韓国教科書を照らし合わせたところ、92穴にも及ぶ部位の相違が確認された。この相違を日中韓の専門家が埋めるべく、2年半の間に6回の非公式会議を重ね、ようやく361穴部位の草案を完成させるに至った。そして、2006年11月1日につくば市で開催された経穴部位国際標準化に関する公式会議で、361穴の部位が合意され、冒頭に記載したようにWHO/WPROから

公式英語版（以下、公式版）が出版された。

経絡経穴の日本教科書が完成間近！

しかしこの内容が教育に確実に反映されて初めて、公式版が活きることになる。ジュネーブ会議後にとった日本の対応を今回も繰り返すようであれば標準化された意味など全くなく、専門家の自己満足に終わってしまう。公式版を基にした日本の教科書を作成することが最も重要である。これに向けて、2007年夏より、東洋療法学校協会と日本理療科教員連盟は、教科書編纂委員会を立ち上げ、そこに第二次日本経穴委員会が協力するかたちで教科書の編纂を行ってきた。編纂にあたっては、日本の鍼灸の歴史と文化をも反映した内容となるように配慮しながら検討を重ねてきた。

教科書は3章からなり、第1章「経絡・経穴の基礎」で経絡の概要を解説し、第2章「経脈・経穴」では361経穴部位に公式版の表記を用い、教科書として具体的な取り方、解剖も詳細に列記されている。さらに、臨床に頻用される奇穴（新穴含む）32穴については、取り方と主治が含まれている。経穴図についても公式版に勝るとも劣らないものになると聞いている。第3章「経絡・経穴の現代的研究」では、経絡現象、経穴の概念と現代科学的研究などが新たに追加されている。また参考資料として、経絡経穴関連の国際標準用語などもあり、非常に豊富な内容になっている。編纂にかかわった委員の高い専門的知識と統一教科書への情熱に敬服する次第である。

統一教科書に沿った教育の始まり

経穴部位の国際標準化から教科書作成、そして最後のステップは教科書に沿った教育の実践である。特に経絡経穴を専門に講義・実習を担当してきた教員にとっては、これまでの教科書との相違部分はもちろんのこと、全体について再度整理することが必要になってくる。さらに、数年間は新旧教科書が混在するという事態が生じ、国家試験を見据えると、本年4月から新教科書での教育が始まると、3年後の国家試験にその内容が反映されることとなる。そうなると大学の多くは4年時に国家試験を受験するため、現在の大学1年生がその対象となる。このような事態に備え、私が勤務する大学では、現1年生に、『経絡経穴概論』（東洋療法学校協会編）は購入させておらず、限られた資料のなかで、経絡・経穴の各論では、変更されていない部分から導入し、大きな変更点は公式版をもとに資料を独自に作成し講義にあたっている。3月には鍼灸学科の教員、非常勤講師を集めた調整会議を拡大して開催することにしている。

各養成施設には、新教科書が届くまで、2007年3月にお茶の水女子大学で開催された「WHO標準経穴部位報告会」の資料で変更の概要を把握し、公式版、本誌、全日本鍼灸学会雑誌などを参考に、導入教育がスムーズに運ぶよう全学的な取り組みがなされることを切に願いたい。

おわりに

経穴の部位が変化しなかった時代はないという。残念ながら、正しい経穴部位は存在しない。学校教育では、臨床家が用いる効果のある経穴を探り、そこに鍼灸治療を施すための定点（基準）をまずしっかりと修得させることが重要である。その定点を集大成した古典の部位が公式版に示されている。新教科書に沿った教育が始まると、教育現場での混乱は必至であるが、公式版の意義を再認識し、しっかりと将来を見据えていくことが必要である。